

「世界文化遺産／飛鳥・藤原の宮都」の宿題

2026/09/26 古田会レジメ

新庄宗昭

◆色々なところでお話をしてきた・・・「飛鳥浄御原宮は明日香村岡の台地には無い」と。

今日は、他力本願でとどめを刺そう・・・井上命題。

『周到な計画に反する不自然で不合理な復元は、研究者の不十分な分析あるいは識見のなさによる。目を瞑って見逃してはならない。ましてや、古代の技術者に不合理の責任を被せることは御法度である』（意識）。

◆飛鳥宮＝律令宮殿のコアである内郭が不自然な逆台形である。

内郭遺構図は、井上命題のいう「整然とした状況ではない」。実は、古代の技術者が何らかの理由で不自然に施工したという遺構事実に基づくのではなく、現代の研究者（樞考研）が、机上で分析し、作図した「創作想像図」である。古代の技術者とは縁もゆかりもない。さらには己が不合理な遺構図を作図しておいて、「この宮殿は全体的に造営時の測量・施工誤差が大きい」と無責任に言い放つ。信じがたい。古代の技術者に対する一握のリスペクトもない。

◆プロの集団が落ち込んだ陥穽

なぜ、プロ集団がこのような不自然な結果を導いたのか。通常の調査発掘の手順を踏まなかったからであり、矩（サシゴ三・四・五）とリバーズエンジニアリングを遵守しなかった。

昭和40年代、競争的都城構造復元の時代。大和飛鳥は神武天皇以来の我が国の首都。「無い」ことは論外であった。調査の前提として律令宮殿はなければならなかった。つまり、この創作遺構図が考古学の基本手順を外れた代物であることは百も承知で、目を瞑ったのである。

◆飛鳥宮には内郭は無かった

井上命題に照らして、逆台形に作図された創作想像図は無効である。内郭は存在しない。

◆内郭が無いということは、岡の台地に飛鳥浄御原宮はなかったということである。

律令宮殿は①正方位・矩形のマスタープラン、②宮中軸線、③線対称に矩形の殿舎群、④矩形の内郭や外郭で圍繞されることである。明日香村岡の台地には律令宮殿はない。

『書紀』によれば、飛鳥浄御原宮は天武天皇の執務した律令宮殿である。もし、この創作した想像図を律令宮殿であると主張するのであれば、井上命題に反しないことを証拠によって説明する必要がある。少なくとも、実例を上げなければならない。

反論が聞こえる「他所にそんな宮殿はないじゃないか。どこにあるというのだ！」と。
→「探しなさい。ここにはありません。」と申し上げるしかない。

・・・・・・では、この岡の台地の宮殿群は何だったのか？・・・・・・

◆『書紀』持統五年一二月条に「右大臣（二位・三位）に賜宅地四町（60,000 m²）」とある。その基準を持統は何によったか？ それは「嶋宮」ではないか。嶋宮は天武・持統の長子草壁皇子が伝領した飛鳥にある蘇我系天皇家の別業であるが、これの大きさがおよそ四町だったからではないか。宅地四町の好例が平城京左京二条二坊の長屋王邸である。長屋王は高市皇子の長子、草壁皇子の甥に当たる。このクラスの皇族の邸宅のおよその規模が想像される。

◆嶋宮の佇まい・宅地四町

長屋王邸とそっくりの佇まい。全体の大きさ、建物の数、建物の配置、建築密度、建物の規模、郭に囲まれた雰囲気。宮中軸線に規制される律令宮殿ではなく、家政機関を含んだ皇族私邸の佇まいを示す。

◆嶋宮（皇子宮）の機構・施設・建築

佇まいに見る皇子宮の生活の仕組み。なぜ、五十棟もの建物があるのか。つまり、多くの建物が集合する佇まいの意味である。（参考・長屋王邸木簡、仁藤敦史の皇子宮研究）

◆嶋宮の歴史六〇年・八代の当主・途切れない土地利用

嶋大臣（馬子）→吉備姫王→蝦夷→入鹿→葛城皇子→糠手姫皇子→大海人皇子→草壁皇子

◆飛鳥川を基軸とした空間構造・正殿配置

岡の台地の五十棟に及ぶ建築遺構群は、おそらく複数の時代に跨った佇まいを投影していると考えてよい。五棟の正殿級殿舎は、時代をやや異にする八代の当主の正殿であろう。SB0301などは、当主が交代して、庭園を設えるなど変更を加えている。律令宮殿ではない一つの傍証である。この嶋宮の土地利用の特徴は、飛鳥川を最大限に取り込んで棚田状扇状地に雛壇状に正殿を配置するという、飛鳥川を軸線とした修景的な構造を持っている。この正殿を支える家政部門は長殿 SB6205 や大井戸など、八代を通じて北東部に位置が固定されて機能しているように見える。

◆岡の台地の遺構が示す微妙な歴史の重なり

発掘調査報告書にみる通り、現場の遺構は複雑で時代弁別が困難を極めている。通説がいう割り切った単純な3層の歴史（飛鳥宮Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期）の重なりではないのではないか。「嶋宮」六十年の連続した歴史が薄い層序の中に重なっていると考えられる。

◆急ぎすぎた結論・嶋宮と飛鳥浄御原宮

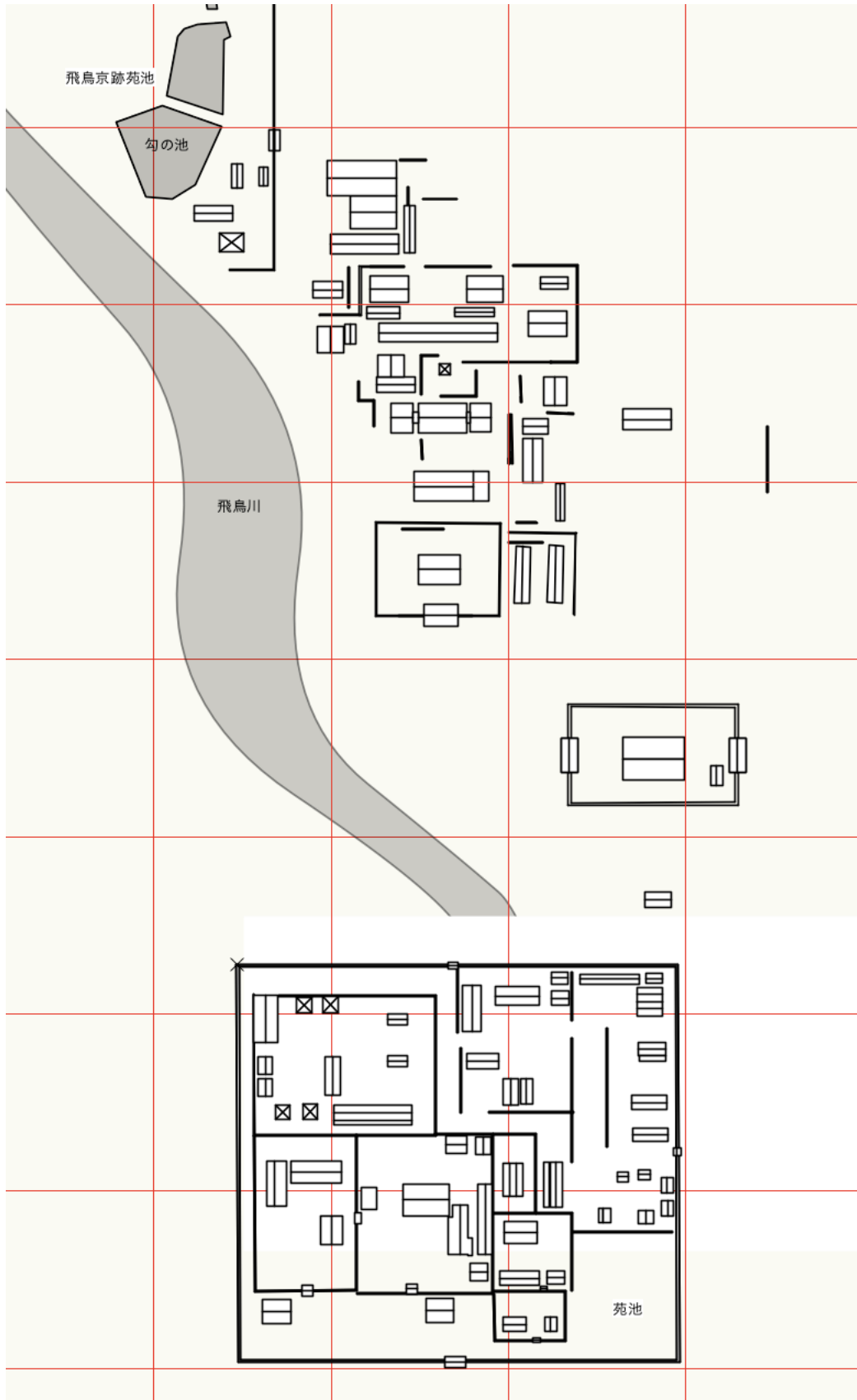
1980年までには、石舞台古墳のある島庄遺跡が「嶋宮」であるとされ、一方、岡の台地（板蓋宮伝承地）には飛鳥浄御原宮の逆台形の内郭構造が提案される。それぞれ、二十世紀末までにはほぼ定説となる。その後、二十一世紀を迎えて、「勾の池」のある飛鳥京跡苑池遺構の発見、西一本柱列の不存在の証明、北一本柱列以北の正殿遺構の発見など、定説を覆すに足る調査結果が発表されるが、遅すぎた。後の祭りである。世界文化遺産登録へ走り始めた後だ。止めようがなくなる。シーツ（正木裕）。

特に、勾の池の発見は、嶋宮を証する決定打であり、これを覆す逆転打は将来もないのではなかろうか。末永雅雄の後輩は末永雅雄に代わって、濱田青陵・喜田貞吉に真摯に報告すべきであろう。「先生、本物が出ました」と。

◆島庄遺跡は十一町歩の農事遺跡（田荘）と考えられる。方形池は単なる農事用溜池。

◆明日香村岡の台地には飛鳥浄御原宮のあるべき場所はない。世界文化遺産の登録は済んだのだから、これからは本気で探さなければ……。研究者に残された宿題である。

2026/09/19 了



上図／嶋宮遺構復原図（私案） 下図／長屋王邸復原図（奈文研） 100mx100m